

アートマイムから、詩の朗読へ 木内 ゆか

前の号ではポーランド発の身体表現「アートマイム」のことを書かせていただきました

フランス発のパントマイムがコミカルな演技で笑わせてくれるエンターテインメントであるのとは対照的に、アートマイムの表現するものは「人間」又は「生命」といえるかもしれません。小道具も、場合によっては効果音すらない舞台に立ち、あらゆるニュアンスや質感を、インナーマッスルを使って表現していきます。たとえば暗闇の中で何かに触れて「ハッ」と息を飲むとか、正体が分かって恐れが融けていくときの安堵感等々…。演者と観客は呼吸を通してあらゆる感情を共有します。このとき演者は感情の媒体にすぎず、自分の個性は隠します。私たちレッスン生は「身体を消す」よう指導されます。

師匠の JIDAI 氏(日本人男性)の舞台を観ていると「自分の夢」を見ているような感覚になります。眠くなる人がとても多いのは、あまりに深く潜在意識に入ってくるからかもしれません。

私自身はアートマイムを学びながら、今は自作詩の朗読をしています。小さな会場に一人で立ち、マイクも音楽も使わずに、詩を朗読しはじめて一年になります。朗読ではあるのですが、私にとってはアートマイムと同様、聲で「人間」や「生命」を表現することを目指しています。

2023年5月に北海道詩人協会賞を頂いた詩集『ああ そうやって私たちは 日ごと夜ごと 千年先まで』には恋愛詩が多く、舞台では様々な女性を演じています。

始めた頃は大きな聲ではっきり読むことだけに専念しておりましたが、次第に欲が出てきて動作や声音でキャラクターを演じるようになりました。回を重ねるごとに文章を暗記し「ひとり芝居を観ているよう」と言ってくださる心優しい方々も…。しかし今思うとその頃の朗読は私の解釈と個性を前面に出した「大人の学芸会」であり、微笑ましくも痛々しいものだったと赤面するのです。

どうしたら師匠のように、潜在意識に深く届く「異次元」を提供できるだろうか。

空間に詩だけが立ち上がる
詩人はそこにはいない

答えはまだ見つかっていません。はるかに遠い道のりなのでしょうが、先日10回目のパフォーマンスのときに、会場である東京の駒込平和教会の室内と、自分の身体が楽器のように共鳴しうることを発見しました。



自分の書いた詩を信じて手放すこと

いつもの焦りはなく、もう一人の自分が室内のすべてを冷静に把握しているのです。腹式呼吸で広がる私の腹腔は、そのままクリーム色の室内で、調度品やお客様を当たり前のように愛おしく包んでいました。セリフの強弱や感情のニュアンスも、詩が人格と意志を持ったように自在にコントロールしていたので、私はほとんど何もすることがありませんでした。

私にとって朗読は親子離れの儀式のようなものなのかもしれません。咽喉から出て羽ばたいていく言葉たちをただ見つめていました。



『ああ そうやって私たちは…』より

スプーン

とても近づいた時にだけ
正しく映すことができます
少しでも離れたら 世界は転覆してしまう
スプーンです 蕾です
ステンレスの 雫です
ポタージュスープを一匙掬って
ピンク色の口腔に羞(つつが)なく注ぎたい
彼らの胸を温めたい 唯それだけの
スプーンです なめらかなステンレスは
一本あしの祈りです…

(きうち・ゆか、横浜市)

映画『戦場のピアニスト』 4K デジタルリマスター版 札幌・シアターキノ、2024年1月6日～ ロードショー



名匠 ロマン・ポランスキー監督作品

フルシャワ・ゲットー蜂起から80年/不朽の名作が、4Kの美しい映像で甦る
原題: The Pianist | 2002年 | フランス・ポーランド・ドイツ・イギリス・アメリカ
英語・ドイツ語・ロシア語 | 150分



ポーランド発祥のアートマイム 木内 ゆか

ポーランドにはステファン・ニジャウコフスキという世界的に有名なマイムアーティストがいます。彼は芸術の分野で長年貢献したため、二度にわたり勲章とメダルを授与されました。そして喜寿を超えた現在でも舞台の上で圧倒的な存在感を放ち続けています。



私は東京で、彼の孫弟子にあたる日本の方(JIDAI)から、このポーランド発の「アートマイム」を習っています。レッスンはまず凝り固まった筋肉を自分で発見し触れることから始まります。五年通っておりますが、長年の習慣で身に付いた心身の癖は頑迷です。私は赤ちゃんやあらゆる生き物に通底する普遍的な「感覚」を取り戻したくて、毎週東横線に乗っているのかもしれない。

先生は五十代の男性です。彼の手は白い木の花のように咲き、軟体動物のように泳ぎ去ります。ネコ科として歩き、オオカミのように遠吠えします。枯れ木として乾燥し、死体として転がることもあり

す。まるでスカーレット・ヨハンソンが主演した映画「LUCY」を観ているかのようです。

ピエロの大道芸がトリックで笑わせてくれるのとは対照的に、このポーランド発のマイムは身体から身体に共鳴させる「詩」と言われています。それは言葉にする前の「感情」であり、延髄で見る「夢」のようでもあります。私たちの身体は太古の記憶を満々と湛える(メモリースティック)で、脊髄では東洋と西洋の海が渾沌と渦巻いているようにも思うのです。

(きうち・ゆか、北海道詩人協会会員、横浜市)

=左写真=ステファン氏主催のマイム公演に招聘されたJIDAI氏(2023.5、ワルシャワ)

* <https://jidai9.wixsite.com/jidai> / <http://hokkaido-poland.com/POLE/POLE83-84ArtMime.pdf>



ポーランドとの出会い 林 祥史



新会員の林祥史です。去年3月に10年ぶりに札幌に帰ってきました。北海道でもポーランドとつながりを持つことにこの上なく喜びを感じます。現在は札幌市内の高校で英語教員をしています。コロナ禍の少し前まで大学院生として北欧フィンランドで研究をしていました。

2008年に愛知の高校から北海道大学に進学しました。ポーランドの方と接する最初の機会は、専門の哲学の研究者や私が大学生活を送った恵迪寮にいた留学生でした。また、寮の後輩がドイツに留学した際お世話になった親友がポーランドの方で、彼の話の影響でポーランドがますます好きになりました。

その他、2年生の春休みにオックスフォード大学とソルボンヌ大学に留学した際も、現地で助けてくれたのはポーランド人の研究者でした。このようにポーランドとはどこに行ってもご縁があり、不思議に思います。

以上のようなご縁のためか、卒業後に3年間の社会人生活を経て海外の大学院への進学を検討した際、ワルシャワ大学の大学院も有力な候補になりました。その時の現地の大学担当者の対応や友人たち

の助けが心を打ち、留学先にはならずとも私の特別な国になりました。進学したヘルシンキ大学院では研究室の同期のお母さんがポーランドの方でした。その同期が突然ポーランド語を話し始めたり、暇があれば古いポーランドの映画を持ってきたりするので、結局ずっとポーランドへの愛着は薄れませんでした。

友人の実家のある田舎町の風景、夜行列車で行ったクラクフの暁、おとぎ話の中に紛れ込んだかのようなウォヴィチのお家——コロナ禍を経た今思うと、幻のような風景でした。

あれほどに素敵な人たちと出会い、夢のような時間を過ごしたポーランドという国は、私にとって一生かけがえのない特別な存在です。帰国した今でも繋がりが持ててこの上なく嬉しいです。(はやし・よしひと)